

ぬ交流の実相は、どうしたわけか、我々の「国文学」の常識からは、すっぽりと抜け落ちていく。

京都の国際日本文化研究センターでは、このほど「東アジア文化交流史研究」と銘打って、小規模な国際研究集会在催された（上垣外憲一助教授の主催）。『奇遇』の一件をはじめ、興味尽きない文化史上のさまざまな交流のありさまが報告された。五山僧中巖円月の中国体験が、北京大学助手の孫容成さんと山東大学教授の高文漢教授のおふたりによって相互に照射され、またカナダのリチャード・リン教授は、『日本国志』の著者、黄尊憲（1848-1905）が、外交官としての日本滞在中に、石川鴻齋（1833-1918）をはじめとする明治日本の多くの文人とも交流をもっていた事実を詳細に発表した。筆談によって意思疎通をはかる文化圏の存在は、さらに韓国、江原大学の姜東燁教授が確認する。李暉光（1563-1628）の北京滞在（1597）のおりの記録、『芝峰集』には、琉球の使節との交流のほか、安南の使節、馮克寛との詩文の交換が記録されていたからだ。これはビン・シンさんが驚嘆する。馮はベトナム史に通じた学者なら誰でも知っている知識人。だが李はベトナムでは未知の馮の詩を克明に記録していたのだ。李が「指南車」で安南を示唆すると、馮は「東南五色望雲車」と巧みに応じていた。

連載② 東アジア文化交流史の可能性

我々の「国文学」の常識からすっぽりと抜け落ちた交流の実相

国際日本文化研究センター研究員

稲賀繁美
inaga shigemitsu

東海散士（1852-1922）

の『佳人の奇遇』は「スペイン革命に失敗した貴女幽蘭、インド独立運動に心を砕く烈女紅蓮、戊辰のむかし会津落城の悲運に遭った体験からこの二佳人の運命に共感を禁じえない東海散士、この三人の交情を中心に、祖国の独立を回復しようとする亡命の志士たちの情熱を、格調高い漢文体で謳い上げた叙事詩的な作品」である（前田愛）。初編は明治十八（1885）年。ここまでなら明治文学史を齎したほどの日本文学研究者なら、一応は知っている話だろう。

ところでこの小説、横浜に亡命していた梁啓超（1873-1929）の手で中国語に『佳人奇遇』として訳されたばかりか、さらには、フランス留学中の潘周楫（Phan-Châu-Trinh）（1872-1926）によってベトナム語に、しかも韻文で訳されるに至る。

『佳人奇遇演歌』（Giãi-nhaân kỳ-ngõ diên-ca）（1911-25?）は、『金雲翹』（Kiêu）と並んでベトナムの国民文学を代表する作品となる。阮愛国（のちのホーチミンといわれている）が、原稿の階段で本編を、興味をもって読んだ事実も知られている。だが、これが日本に源を持つ作品であったという経緯は、近年に至るまで判明しなかった。この事実を突き止めたのは、現在カナダのアルバータ大学教授ビン・シン（Vinh Sinh）さん。こうしたアジア文明圏の思わ